

02-003

中高生の身体活動と健康関連QOLの現状

富中 美幸¹、村端 真由美²、谷村 晋²、
天野 敬史郎²、堀部 敬三³、前田 尚子³、
渡邊 健一郎⁴、加藤 由香⁴、平山 雅浩²

¹三重大学医学部附属病院

²三重大学大学院医学系研究科

³国立病院機構名古屋医療センター

⁴静岡県立病院機構静岡県立こども病院

【目的】

身体活動不足は全世界の死亡危険因子として認識され、わが国でも身体活動の促進を推奨している。身体活動と健康関連QOLは関連があることが報告されており、身体活動の低下が著しいとされる中高生の身体活動の状況を明らかにすることは健康関連QOLの向上につながる。本研究の目的は中高生の身体活動および健康関連QOLの現状とその関係性を明らかにすることである。

【方法】

中高生とその保護者を対象に体の悩み、身体活動状況、部活動、身体活動量(1週間の高強度・中強度・低強度別の活動時間)、PedsQLを用いた健康関連QOLを調査した。解析にはR ver3.5.1を用いてWilcoxon順位和検定、多重比較検定、重回帰分析を行なった。所属施設の倫理委員会の承認を得て実施した。

【結果】

回答数1,237名、平均年齢15.7歳、男子596名、女子641名であった。1週間の合計身体活動量の中央値は中学男子285分、中学女子210分、高校男子180分、高校女子120分であった。男女($p < .001$)および中高($p < .001$)で合計身体活動量に差が認められた。部活別の合計身体活動量の中央値は、運動部540分、文化部60分、無所属80分であり、運動部が有意に多かった($p < .001$)。健康関連QOL総合得点の中央値は運動部96.7点、文化部93.5点、無所属95.7点であり、運動部と文化部($p < .001$)、無所属と文化部($p < .01$)に差が認められた。健康関連QOL総合得点に関連がみられたのは、男子は身体活動が「好き」(偏回帰係数(以降B)=16.97, $p = .001$)、「やや好き」($B = 13.52$, $p = .011$)、体の悩み事が解決「できている」($B = 4.91$, $p = .029$)、女子は体の悩み事が「ある」($B = -4.63$, $p = .009$)、体の悩み事が解決「できている」($B = 5.02$, $p = .006$)、家族との身体活動が「月1回以上」($B = 5.54$, $p = .046$)、身体活動をする仲間が「いる」($B = 4.01$, $p = .029$)、高強度の身体活動量($B = -0.01$, $p = .034$)であった。

【考察】

子どもの推奨身体活動量は1日60分以上、1週間420分以上であり、多くの中高生が推奨レベルに達していなかった。部活動に無所属の者の健康関連QOLが高かった点に関しては、身体活動以外の視点からもさらなる検討が必要である。身体活動と健康関連QOLの関連要因には男女により違いがみられるため性別に適した身体活動の促進が望まれる。

【まとめ】

男子は身体活動に対する嫌悪感の軽減、女子は体の悩みの軽減、身体活動をする仲間や家族の存在と健康関連QOLに関連がある。

02-004

思春期主体価値とボンディング障害の関連

帯包 エリカ、川上 憲人

東京大学大学院医学系研究科 精神保健学分野

【背景】

ボンディング障害は親が子に対し情緒的絆を築くことのできない障害で、子の精神的発達や小児虐待と関連があり、公衆衛生の重要な課題である。ボンディング障害の要因として、親子を取り巻く社会的環境、親子の要因が関連することが指摘されている。思春期主体価値は、自分は何を大切にしているかという価値の領域と、その大切に思う価値に対してのコミットメントの度合いにより構成される概念で、身体的・精神的・社会的な健康と関連があり、メカニズム上はボンディング障害と関連が想定されるが、両者の関連は検討されていない。本研究は、思春期に形成された主体価値が、成人期に子どもに対するボンディング障害に与える影響を横断研究の二次データ解析により明らかにする。

【方法】

まちと家族の健康調査(J-SHINE)は、2010年より東京都および近郊の成人約4000名を対象とした健康の社会的決定要因に関する調査である。この調査参加者で、子を養育し、思春期主体価値に関する質問項目へ回答した者を解析対象とした。15歳時の状況を想起した思春期主体価値(大切に考えていた価値領域、価値へのコミットメント[PVQ-II調査票])と自身の子に対するボンディングへの回答を用いた。性別、年齢、最終学歴を調整した多重ロジスティック回帰分析で、思春期主体価値のボンディング障害に寄与するオッズ比を算出した。

【結果】

解析対象者は466名で、「子どものことをいとおしく感じる」という問いに「あまり/全くそう思わない」と回答したのは1.6%、「子どもに対してなにも特別な気持ちがわかない」という問いに「いつも/時々/たまにそう思う」と回答したのは4%であった。思春期に大切に考えた価値にコミットメントが高いと、自身の子どもに対するボンディング障害(子どものことを愛おしく思えない、子どもに対して特別な気持ちがわかない)の頻度は有意に低かった(オッズ比 0.68; 95% CI 0.51-0.91)。

【考察】

思春期の主体価値へのコミットメントは、成人期に次世代に対するボンディング障害と有意な関連が認められ、今後は機序に関する詳細な検討が期待される。

【倫理的配慮】

本研究は東京大学医学系研究科倫理委員会に承認されている。

【謝辞】

本研究は、科学研究費補助金新学術領域研究「脳・生活・人生の統合的理解にもとづく思春期からの主体価値発展学」の助成を受けた。